［教育目標］
心豊かな生徒
自ら学ぶ生徒
たくましい生徒

桐の里だより

令和４年１月号
三島町立三島中学校
校長　関根宏房
ホームページＵＲＬ
https://mishima.fcs.ed.jp/三島中学校

三島中学校ホームページでは、学校だよりカラー版を掲載しておりますバックナンバーもご覧いただけます。

今年の干支（えと）は壬寅（みずのえ　とら）
陽気を孕み春の胎動を助く

3学期始業式

あけましておめでとうございます。

令和４年がスタートしました。

昨年末のクリスマス寒波以来、厳しい寒さが続いていますが、一月十一日、三学期の始業式では、元気いっぱいに校歌を斉唱する子どもたちの姿を見ることができました。

今年は十二支３番目となる寅年。干支は壬寅（みずのえ・とら）となります。

干支の意味からは、壬寅の年は「陽気を孕み、春の胎動を助く」、冬が厳しいほど春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれる年になる、ということのようです。

そもそも壬（みずのえ）の方が「生まれる」、寅の方が「成長する」という意味をもつようなので、簡単には「生まれたものが成長すること」となります。子どもたちそれぞれが、想いをもち、目標としていることに向け、努力していることが、芽を出し、すくすくと成長できるよう、教職員一同支援していきたいと思います。

さて、三島中にも昨年夏からずっと水面下で構想を練り続け、この冬ついに芽を出し生まれたものがあります。

それは、宿題（家庭学習）のあり方についてです。

授業のあり方については、子どもたち一人一人の状況に応じて、丁寧に進めているにもかかわらず、こと宿題に関しては、ほぼ一律で出されることが通常となっており、それがあたかも平等であるかのように考えられています。しかし、ある程度理解でき、定着しかけている子どもと、ほとんど理解できていない子どもとでは、状況は違います。そこに一律で宿題を課すのは、いかがなものか、という考えによるものです。また、宿題を課すにしても、その目的が、定着のためなのか、予習のためなのか、学習習慣づけのためなのかで、取り組む側の気持ちも変わってきます。学校教育の歴史の中で、互いの関係性からそこまでの説明や対応の必要はないであろうという、思い込みがあり、簡略化されたのかも知れません。更に言えば、テストや検査を計画すれば、子どもたちはそれに向けて勉強するであろうというのも、思い込みの一つかも知れません。このような配慮に欠けた取組が、全国的にいろいろな問題を引き起こしていることを、教育に携わる者として、見過ごせないところまで来ていると考えます。

三島中では、ここに焦点をあて、取り組むべく、スタートを切りました。この取組が大きく進展し、子どもたちの学習に向かう気持ちが育ち、延いては、宿題として課されるのではなく、自ら必要を感じて取り組む、本当の意味での学びに繋がることを、切に願います。

１０年後の三島町を考える　その時あなたは？

クロームブック　持ち帰り練習　第二弾！

第一弾「桐子ちゃん令和版アップデート大作戦」に続き、昨年暮れに行ったクロームブック持ち帰り練習第二弾は、課題作文でした。「十年後の三島町の展望、そのときあなたは故郷三島町とどのように関わっているか」をテーマに、四百字以上四百四十字以内で作文を書く、というものでした。

もちろん、下校後、ＰＣに届いた課題に取り組み、夜九時までにＰＣで送信して提出する、という原則は第一弾の時と変わりません。

教育目標「故郷を愛し、明日の社会を担う人間として調和のとれた生徒の育成をめざす」のもと、様々な学習に取り組んできた子どもたち。自分の気持ちをどのように表現するのか、どきどきしながらも、興味をもって読ませていただきました。一年生から三年生まで共通のテーマでしたが、学びの進み具合の違いなのか、学年ごとに特色がありました。

十年後の三島町

十年後の三島町の状況については、大きく二つに分かれていました。一つは、少子高齢化が悪化し、若者がいなくなってしまうという状況、もう一つは、人口減少から転じ人口が増加しているという状況です。ここからが、本校生徒の特徴と思える部分ですが、どちらにも前提があり、それは、町が活性化対策を講じて、それが成功した場合には人口増加に、反対に町がこのまま何の対策もせずに十年後を迎えた場合には、悪化にという見解です。次世代の議会を目標とし、町の活性化対策を真剣に考えたからこその意見と見て取れます。具体的にどのような町になっているかは、それぞれに想いがあるようですので、何かの機会に子どもたちの作文を読んでいただければと思います。

三島町との関わり

その時、自分は三島町とどう関わっているのかについては、子どもたちの想いに共通点がありました。

それは、三島町が大好きだという想いです。年齢的に大学を卒業して間もない時期から、社会人として数年経ったくらいになります。何か自分に能力が持てていると考えている子は、それを通して町に向け発信したいという想いをもっているようです。例えば、マンガ家になった自分は、自分のマンガで三島町の人々を元気づけたいとか、ＩＴ技術者となった自分が、ＩＴで町を支えたいとか。また、特にそのような能力とは関係なく、仕事に疲れた自分や、休日の自分が、三島の美しい景色を見に来たいとか、ふるさと納税で町に貢献したいとか。

そして、この他に共通しているのが、自分は三島には住んでいないということです。

自分の夢を実現させる場が、今の三島にはない

大人になった彼らが、三島に住まない理由を分析してみると、自分の夢を実現させる場が、今の三島町にはないということのようです。

もちろん、プロスポーツ選手など、三島在住での活動が難しい夢もありますが、一般の企業や医療に関わる仕事を望んでいる子であっても、生活拠点を近隣の都市部と考えているところには、何か解決策の必要性を感じたところです。

子どもたちが、大好きな町に望むものと、現実に町が目指すものとには、まだ距離があるのでしょうか。

十年後、二十年後、三島の子どもたちは町を離れてしまうのか、その時、どのような若者が、町にいて、町を支えているのか。学校教育の中で可能な教育活動を今後も模索しながら取り組んで参ります。

今月の１枚

サイノカミ（宮下地区）
令和4年１月15日(土)